

Title	一九三〇年代における日本のイスラーム政策とオスマン皇族
Sub Title	Japanese policy for the Muslims in the 1930s and the Ottoman princes
Author	デュンダル, メルトハン(Dtindar, Merthan)
Publisher	三田史学会
Publication year	2007
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.75, No.2/3 (2007. 1) ,p.53(233)- 85(265)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20070100-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一九三〇年代における日本のイスラーム政策とオスマン皇族

はじめに

アジア大陸の西に位置するトルコと東の日本との関係は、両国の距離が離れているため比較的遅く始まった。

二〇世紀最初の四半期は、オスマン帝国にとっては滅亡期にあたり、日本にとっては高揚期であった。ヨーロッパ列強の攻撃に苦慮するオスマン帝国は、東方において著しい発展を見せ始めた日本に対して関心を示すようになった。しかし、相互に友好関係を築くことを希求したにもかかわらず、当時の政治情勢はそれを許さず、両国が接近する道は閉ざされていた。一八八九年、アブデュルハミト二世が親善を目的として日本に派遣した軍艦エルトウルル号によって先鞭がつけられたトルコと日本との関係は、彼の死後約二五年を経てその血を引く孫の

アブデュルケリム来日によって新たな展開を迎えることになる。

メルトハン・デユンダル

本論は、満州国成立後の一九三三年におこなわれたアブデュルケリムの来日問題を日本の対イスラーム政策、東トルキスタンをめぐるトルコ―日本関係の文脈のなかで明らかにしようとするものである。これについて論じる前にあらかじめ近代における日本とイスラーム世界の関係史を簡単に振り返り、それを整理した上で論じていくことにしたい。

1 帝国主義の道を歩む日本とイスラーム世界

一八六八年の明治維新以後、日本は封建的な幕藩体制から天皇制を柱とする中央集権体制へと移行した。⁽¹⁾これには流血の衝突を伴ったが、開国の結果、学問、技術、

貿易、軍事の諸分野において先進的なヨーロッパ諸国の水準への到達をめざす新興勢力として歴史の舞台に登場した。⁽²⁾ とくに経済の分野において著しい発展をみせた日本は、市場をめぐって東アジアにおける他の地域大国であるロシア帝国、清と敵対し、その帰結として一八九四―一八九五年に日清戦争、それに続いて一九〇四―一九〇五年に日露戦争が勃発した。

これら二つの戦争に勝利した日本は、一躍世界の注目を浴びたが、とりわけロシアの支配下で抑圧され、呻吟するムスリムやトルコ系諸民族が日本に寄せる期待は大きかった。⁽³⁾ 日本はこのような関心と共感を得たのみならず、勝利したことによってアジア大陸で新しい領土と経済的権益も獲得した。⁽⁴⁾ 日本が得た新たな地位を守つていくための基本的な要件の一つは勢力圏の拡大であった。なぜなら二つの戦争において日本は清やロシアに勝利したとはいえ、軍事、経済、政治、いずれの面でもまだアジアにおいて決定的な力をもつに至らず、その足場を固めるためにも勢力圏を広げることが必要であったからである。

日本が列強と肩を並べていくもう一つの道は、イスラーム世界を味方につけることであつた。当時、約三億二

〇〇万人の人口を有するイスラーム世界は地理的に広大で、戦略的にも経済的にも非常に重要なところであつた。⁽⁵⁾ 信仰の面のみならず、同時に社会的にも政治的にも一つのまとまりを成すイスラームの連帯精神は、世界のムスリムを人種、民族の違いを越えてたがいに緊密に結びつける役割を果たしていた。これからパレスチナやモロッコのムスリムが直面する困難な状況がシベリアやフィリピンのムスリムのもとにも伝えられ、影響を及ぼすということとはよくあることであつた。

「ムスリムは、たがいに兄弟である」という論理は、アルバニアから中国にまで広がるイスラーム世界を政治的に統合していく際に非常に大きな力を發揮する武器になり得る。これらのことを念頭に置きながらイスラーム世界において尊敬を勝ち得ようと努める国が覇権争いにおいて大きな利益を手にするとは間違いない。一九世紀の最後の四半世紀においてイスラームが有するこの特質に気づいた日本は、二〇世紀初頭においてイスラーム世界から友愛と尊敬を得ることに於いてヨーロッパ列強に比べて一歩も二歩もリードすることができたのである。⁽⁶⁾ 日本にとつてもっとも近い隣国であるロシアと清の領内にはそれぞれ戦略的に重要だと思われる地域に数多く

のムスリムの少数民族が住んでいた。これらの人たちは長い歴史の中で絶えず統治を周知徹底させようとする政府と軋轢、衝突を繰り返していたが、日本はこれらムスリムの少数民族を自分の側に引き寄せることによって自己の勢力を拡大する野望を実現することができると考えていた。

ロシアと清以外の地域、国にも日本が利用できると思われるムスリムが多数、存在していた。たとえば、経済的な価値が高く、それゆえにヨーロッパの諸列強の植民地統治の下に置かれたフィリピン、マレー半島、インドネシア島嶼部のようなところには多くのムスリムが生活していた。また、インドには膨大な数のムスリムが住んでいた。彼らはヒンドゥー教徒との関係で言うところと少数民族と見なされるが、イスラーム世界全体の中で見るともっとも人口の多い集団を形成していた。このインドのムスリムを味方につけるといことは、日本にとってイギリスのアジア支配にくさびを打ち込むことに他ならなかった。さらにアフガニスタン、イラン、イラク、トルコと良好な関係を築いていくことは、日本にとってそれらの国がロシア、イギリスに対する防壁になるという利点があった。⁽⁷⁾

日本が中東やアフリカのムスリムと結ぶ関係は、大きな貿易上の優位を確保する一方、ヨーロッパ帝国主義の足下を脅かし、それを不安定にする可能性ももっていた。⁽⁸⁾日本はイスラーム世界の民族主義者、イスラーム主義者たちがつくる組織、団体と関係を築いていくにあたって、戦略的な観点からも心情に訴えるという点からも有利な状況にあった。日本人は親密な関係をつくりあげることを目的として行うプロパガンダにおいてしばしば反ヨーロッパ的な言辞を多用した。さらにムスリムは元来、アジア主義の信奉者であり、ヨーロッパ人とは人種、民族的にはまったく違う存在であると強調しながらその自尊心をくすぐり、彼らを日本の側に引き寄せるということも行っていた。さらに、日本の反共産主義的な言動もムスリムたちの宗教的な琴線をいたく刺激し、その心をつかむ上で有利に働いていた。

日本を優位に立たせた要因として古来から連綿とつづく宗教の本質によるところも大きかったことを指摘しておかなければならない。すなわち、その権威をいかなる聖典にも求めず、信条的には融通無碍な面をもつ神道の伝統が日本人の間に生きていることがイスラームとの関係を良好なものにしていく上で役立った。神道は国家と

天皇によって象徴化されてきた。これによって国に奉仕する日本人は、個人的な信仰に抵触することなく政治的には神道主義者としての体裁を無理なくとることができた。さらに神道の信仰は、郷土愛（祖国愛）の基本原理のひとつをなしていた。キリスト教がこの種の原理と対抗していくことは非常に困難であった。

日本はこのような宗教的な寛容性をもってムスリムに対して影響力を及ぼし、イスラームを弘布しようとする人たちの注意を引こうとした。こうしたなか天皇がイスラームに好意を寄せ、改宗したという噂が流れ、数百万の純粋にイスラームを信仰する者たちのなかには日本の天皇がカリフになってイスラームは世界の中で最大の勢力になると本気で考える人たちも出てきた。⁽⁹⁾

日本のイスラーム政策が成功するかどうかは、変化する政治的バランスに柔軟に対応しながら新しいやり方をいかに打ち出していくかということに懸かっていた。たとえば、帝政ロシアの時代には帝国内の民族的な対立をうまく利用してイスラーム政策が行われた。しかし、ロシア革命後、社会主義政権が宗教に対して弾圧策をとるようになる、それををとらえて、逆にイスラーム政策を打ち出していくことも行われた。

他方、トルコに対する日本のイスラーム政策の変化に目をやると、オスマン帝国末期に影響力が強かったパン・イスラーム主義に翳りがさすと、新たに民族主義のなかでも極端なかたちでウラル・アルタ語系諸民族の優秀さを説くトウラン主義の風潮に肩入れすることが行われた。民族主義はイランとアフガニスタンで有効な武器になり得たが、インドのムスリムたちの間では実際の政治動向によつてはブーメランとなり得た。⁽¹⁰⁾ このためインドにおいては、民族主義に一方的に頼るのでなく宗教問題をうまく利用しながら日本の影響力を強めていくという目標に達する道も探られたのである。

日本はこのような状況を勘案しながら政策を立てていくとし、それは部分的に成功した。日本がイスラーム世界に対して影響力を強めていくとする取り組みは、次の三つの時期、すなわち（１）一九〇五年までの時期、（２）一九〇五年から一九一八年までの時期、（３）一九一八年から一九四五年までの時期に分けて考察していくことが可能である。

第二の時期が終わる一九一八年までの段階は、日本においてパン・イスラーム主義に対する関心が深まり、オスマン帝国ではスルタン・アブデュルハミト二世がパ

ン・イスラーム主義を活性化しようとしていた時期にあたる。ロシアにおいてはトルコ・ムスリム系の諸民族が自分たちの土地を求め、その所有権を主張する動きを見せていたが、このことは日本の対イスラーム政策にとって有利な状況を生んだ。オスマン帝国が目ざしたのは、ロシアの南部国境地域と東部諸地域に広がるアゼリー、タタール、バシキール、カザク、クルグズ、テュルクメン、ウズベクといったトルコ系諸集団の中に宗教的な連帯感情に訴えるパン・イスラーム主義を浸透させ、あわせて民族的な紐帯を強化してトゥラン主義にもとづく政治的統一を創り出すことであつた。このような目的をもつて一八八〇年以降、オスマン帝国からロシアへ、さらにムスリムが住む中国各地にプロパガンダを行う工作員が派遣されたのである。⁽¹¹⁾

日本は一八九四―一八九五年の日清戦争に勝利すると、アジア大陸に日本を好意的な目で眺め、事あればたがいに手を取り合つて連携しようとするムスリムが多くいることを発見した。⁽¹²⁾ 日露戦争（一九〇四―一九〇五年）後に威信と信頼を増した日本は、白人ではないムスリムの眼前に新しいチャンピオンとして登場した。かくして日本は、イスラーム政策をよりきめ細かく浸透させること

を開始し、ムスリムたちに対して公然と接近しつつ時には文化的活動を装いながら政治的企図を実現していったのである。⁽¹³⁾

この他、新聞も日本が宣伝活動を行っていくにあつて影響力のある手段となつた。一九〇六年に日本の天皇がムスリムになつて、イスラームが日本の国教として宣言されるとの報道が発表された。インド、エジプト、トルコでは大きな熱狂が生じ、イギリスやドイツのような国々でも反響があつた。さらに、日本でムスリムの学校、イスラーム関係の文化的な協会が相次いで設立され、イスラームの出版物が発行されるとの報道も広まつた。⁽¹⁴⁾

新しいイスラーム政策の庇護者、支援者は、一九〇一年創設の黒龍会のような大亜細亜主義の思想を標榜する狂信的な国家主義者のグループであつた。その指導者は頭山満、内田良平などである。⁽¹⁵⁾ ムスリムの間ではトルコ系タタール人出身のアブデュルレシト・イブラヒムの名前を思い起こす必要がある。⁽¹⁶⁾ 彼が日本で頭山満、内田良平、犬養毅⁽¹⁷⁾といった人物と一九〇九年に亜細亜義会を創設し、「回教の誓い」⁽¹⁸⁾をしたことは、超国家主義を奉じる日本人とムスリムが運命共同体に入つたことの何よりの証拠である。

かくして日本のイスラーム政策のなかにきわめて影響力のある手段としてトルコ系タール人たちが入ってくるようになった。彼らを取り巻く条件は日本の都合で変わったが、⁽¹⁹⁾一九一七年のロシア革命によって困難な状況に陥ったトルコ系タール人は、望む望まないにかかわらず日本の国家主義者たちと協力することを余儀なくされた。一九一八年以降の日本の対イスラーム政策に組み込まれることになったトルコ系タール人たちは、一九四〇年代まで重要な役割を演じることになる。

一九一七年のロシア革命後の内戦期にアメリカ、イギリス、イタリア、フランスとともにシベリアに出兵した日本は、白系ロシア軍將校たちと接触をはかりながら彼らを軍事的、経済的に支援し、日本の傀儡とすべく努めた。⁽²⁰⁾ コルチャーク提督、アタマン・セミョーノフ、カルムコフ大尉といった司令官たちの指揮下にあり、反ボリシェヴィキを奉じる白露軍に身を置くトルコ系タール人たちと関係を深めたのは、まさにこの時期のことである。この関係はヨーロッパ列強の圧力によって日本軍がシベリアから撤兵した後も続いた。この時期はまた、日本の外交政策を策定する者たちによってトルコ系タール人がアジア大陸のムスリムたちの中で潜在的な影響力

を有することが強く認識された時にもあたっていた。反ボリシェヴィキ軍が敗北すると、これらの軍に身を置くトルコ系タール人は、一九一九年以降各地に散らばっていったが、その一部は満洲や日本軍が支配する地域に逃れていった。⁽²¹⁾ また、これとは別の移動の波が、一九二〇—一九二一年に起きた大飢饉の時期に生じた。トルコ系タール人の多くは故郷を捨てて、ハイラル、⁽²²⁾ 奉天、⁽²³⁾ 満洲里、⁽²⁴⁾ 上海、大連、⁽²⁵⁾ ハルビン等の都市に定住し、それらの地で相互扶助組織をつくっていった。そして、これらの都市で形成されたコミュニティが日本への移住に際して次の飛躍のステップになっていくのである。

移住者たち、なかでも商売に従事するトルコ系タール人たちは、家族を連れてアブデュルレシト・イブラヒムがすでに明治の時代に先鞭をつけた門を通って一九一九年以降、日本統治下の朝鮮へ、さらに日本をめざして熊本、横浜、神戸、名古屋などに住みつくようになった。⁽²⁷⁾ 初期のうちは横浜に他の都市に比べて多くの定住者を擁するコミュニティがつくられたが、その後時が経つと東京、神戸、名古屋のトルコ系タール人の数が増加した。

故郷から遠く離れたところでまったく新しい生活を始

めることになったトルコ系タール人たちが中国、朝鮮から日本に移住した理由には、よりよい生活とより多くの利益を得られる商売への期待があったが、これとは別に政治的な理由もあった。それは日本が一九一八年以降、新たに策定したイスラーム政策と密接に関わるものであった。

一九二四年は、在日トルコ系タール人にとって転換期といえる年である。この年にトルコ系のバシユキール人で名家として知られるクルバンアリー家の一員でもあるムハンマド・アブドウルハイ・クルバンアリーが東京にやってきた⁽²⁸⁾。彼は内戦期に反ボリシェヴィキ軍と協力し、その後一緒に極東、日本軍支配下の地域に移動した。そこで日本との関係をつくったクルバンアリーは、大連で日本によってつくられた南満州鉄道で通訳として働いた。アメリカ諜報機関の報告書によると、クルバンアリーは日本の資金を得て働く諜報員であったといわれ、満洲では日本の特務機関においてロシア語とトルコ語を教⁽²⁹⁾えていた。

一九二四年、クルバンアリーは彼を支持する者たちと東京にやって来たが、彼の東京での行動を調べてみると、日本人たちはクルバンアリーを日本のイスラーム政策を

進めるための道具として利用したと見ることが出来る。クルバンアリーおよび彼のグループがやって来ると、日本でのトルコ系タール人の数も増加し、これによって自分たちが続けてきた暮らし方にも変化があらわれる。

一九二五年一月以降、組織的に金曜礼拝が行われるようになると、同年「東京回教団 (Mahalle-i Islamiye)」が設立された。東京の上流階級が多く住む渋谷につくられた東京回教団とは、その原語である Mahalle-i Islamiye が示すようにトルコ系タール人やムスリムたちが居住する地区の名前も意味していた。クルバンアリーは東京を始めとして日本や日本の植民統治下にある地域に居住するトルコ系タール人たちを組織的に支配下に置こうと努めた。クルバンアリーは、この点に関して短期間のうちに成功したと言うことができる⁽³⁰⁾。

クルバンアリーを指導者と仰ぐトルコ系タール人たちは、東京にあるコミュニティでの教育の必要性を痛感するようになった。このため一九三一年、代々木富ヶ谷一四六番にあった建物を購入し、学校として使い始めた。日本の有力者たちの援助によってこの建物はクルバンアリーの名義で登記された⁽³¹⁾。校舎は当時高級官僚や富裕層が居住する、東京の高級住宅地の一角にあった。開

校式には来賓多数が列席した。⁽³²⁾生徒たちの中には東京在住者以外に日本の別の都市で生活していた家族の子供たち、さらには朝鮮半島からはるばるやって来たトルコ系タタール人の子弟もいた。

「回教学校 (Mektebi-İslamiye)」の開校式については新聞や雑誌を通じて、ロシアや中国在住のムスリムにも伝えられ、日本のイスラーム政策にとって良い宣伝材料になった。校舎の地下に印刷所が開設され、教科書のためにプロパガンダ用の雑誌、新聞、書籍が印刷された。一九二八年、トルコ共和国で文字改革が実施されると、使用されなくなった古い印刷機とアラビア語の活字が新聞社から売りに出され、日本にもたらされた。これによって「回教印刷所」がつくられた。⁽³³⁾一九三〇年一月以降、次々と多くの書籍が印刷され、それは中国からフィリピンまでトルコ系タタール人コミュニティがあるすべての地域に送られた。⁽³⁴⁾

教科書および宗教書以外にもトルコ世界、イスラーム世界向けに日本のプロパガンダを行っていくため、一九三二年以降、雑誌『新日本通報 (Yangi Yapon Muhabiri)』および新聞『真理の宣言 (İlan-ı Hakikat)』の印刷が始まった。一九三四年には日本政府の資金援助によ

りコーランが印刷され、エジプト、アフガニスタン、イラクを含む三三のイスラーム諸国にそれが送られた。⁽³⁵⁾

日本の首都東京での一連の出来事、トルコ系タタール人コミュニティの発展は、世界のムスリムたちの間により影響を与えた。イスラーム世界の新たな守護者は日本であるという考え方すら定着し始めた。とくに一九三五年一〇月一日、神戸でモスクが開堂すると、全世界で大きな反響が起きた。⁽³⁶⁾神戸モスクの完成式典には、内外から多数の来賓が列席し、祝辞では日本がイスラーム世界に向けて行ったことに対して賞賛の言葉が相次いだ。⁽³⁷⁾モスクの開堂式にはインド・ムスリムのもっとも重要な指導者の一人であるミアン・アブドゥル・アジズも参加していた。⁽³⁸⁾

日本におけるイスラームに関する活動で転換点となるのは東京モスクの完成である。⁽³⁹⁾東京モスクは、世界各地から駆けつけたムスリムたちの参加によって、かつ大きな式典によって開堂された。この新しいモスクは、世界で、とりわけムスリムたちの間で大きな反響を呼び起こした。この完成式典に関連して最も興味を引く点は、日本がロシア、中国、満洲在住ムスリムたちと取り結んだ関係において、また世界のムスリムとの関係構築におい

て重要な役割を果たしたクルバンアリーが、建設に尽力した東京モスクの開堂式を見ることなく、その直前に逮捕され、日本から国外追放されたことである。⁽⁴⁰⁾

日本は、大亜細亜主義の理想を実現していくためにイスラーム世界が重要な役割を演じることに気づき、それにしたがってイスラーム政策を策定していった。しかし、その内容と手段はその時々状況に応じて少しずつ替えられ、改定された。一九三〇年代に入ると、従来のトルコ系タタール人に加えて元オスマン帝国の皇族を取り込みながらイスラーム政策を進めていくという新しいやり方が登場するようになる。次にこれについて見ていくことにしよう。

2 オスマン皇族と日本

オスマン帝国の皇族を国外追放に処する法律第四三一号が一九二四年三月三日、トルコ大国民議会で承認された。これにしたがって男系皇族三六名、女系皇族四八名、その子供たち六〇名、総計一四四名が国外追放となった。⁽⁴¹⁾ 国外追放決定後、皇族たちはパリ、ニース、ニューヨーク、バイルート、カイロ、デリー、チラナ、ソフィアなど世界の各地に散らばっていった。海外では自分たちの

手で生活を切りひらいていかなければならなかったが、多くは生活苦に陥った。ある者は窮迫から逃れるためイスラーム諸国から送られた資金援助を甘んじて受け、ある者は娘や息子を外国の王室と通婚させて糊口を凌いだ。とくに女系皇族はイスラーム世界において政治的威信を得ようとするイスラーム指導者にとって願ってもない相手であった。

何人かの男系皇族（シェフザーデ⁽⁴²⁾）は、時として帝国主義諸国によって政治目的に利用された。最後のカリフであったアブデュルメジト・エフエンディ⁽⁴³⁾もその例外ではなかった。彼は国外追放後、スイスのテリトにあるグランド・ホテルに滞在していた。ここで彼はイギリス、フランスの政府関係者、インドのイスラーム指導者として著名なアミール・アリーの訪問を受けた。彼らはエジプト国王フアード一世に対する興味深い提議書を携えてきていた。それは、元カリフがインドかエジプトに移り住み、フアード一世の助力を得てカリフ制を再興して欲しいとの要請だった。⁽⁴⁴⁾ しかし、アブデュルメジト・エフエンディはこの政治的な提案を受け入れず、一九三一年、娘のデュリュシェフヴァルをハイデラバード藩王国の王太子アザム・ハンに、姪のニリュフェルを他の王子ムア

ツザム・ハンにそれぞれ嫁がせることによって窮状を打開しようとした。⁽⁴⁵⁾

インドのイスラーム系の藩王室と結婚した別の皇族として、スルタン・ムラト五世の孫セルマがいる。⁽⁴⁶⁾ 彼女は、一九三〇年代に現在ネパール領内にあるバダルプール州のコトワラ藩王セイイド・サジド・ヒュセイイン・アリと結婚した。カリフの息子であるオメル・ファルク・エフエンディの三人の娘はエジプト王族と結婚した。⁽⁴⁷⁾ スルタン・アブデュルハミトの孫メフメト・オルハンの娘であるネジュラは、エジプトの王子サイード・ベイと、アブデュルハミトの息子アブデュルラヒム・エフエンディの娘ミフリシャー・セルチュクは王子ナイフ・ブン・アブドゥッラーと、そしてアブデュルアジズの孫シユクリエはクウェートのアミール、シェイフ・アフメド・アル・サバハと結婚した。⁽⁴⁸⁾ 男系皇族でもアブデュルハミトの息子メフメト・アビトはアルバニア国王ゾゴの妹セニエと結婚した。⁽⁴⁹⁾

これらの婚姻は、オスマン皇族の生活上の困窮により実現したと考えられる。婚姻の相手側がそれを欲した裏には政治的な理由が潜んでいた。彼らは、オスマン皇族の娘婿になることによって他のイスラーム指導者より一

段と権威が高まると考えていた。トルコ共和国政府もこれらオスマン皇族の婚姻について注意深く見守っていた。⁽⁵⁰⁾ オスマン皇族がカリフ制をトルコ以外の別のイスラーム国家で再興するのではないかとの懸念があり、警戒心を強めていたのである。

これらの心配は必ずしも杞憂とはいえなかった。国外追放されたオスマン皇族のうちトルコ共和国においてスルタン制再興を企てる者がいたからである。イギリス外務省の秘密文書にはこの種の再興活動を試み、イギリスから援助を受けていた何人かの皇子たちについての記録が残されている。イギリス公文書館に所蔵されるグリーン・ペーパーという秘密文書の中に Prince Mahmud Shaukat Seif-ed-din なる皇子とおぼしき名前を見つけることができる。⁽⁵¹⁾ この人物は、最後のカリフ、アブデュルメジトの兄弟でスルタン・アブデュルアジズの末子であるセイフェッディン・エフエンディの息子マフムート・シェヴケト・エフエンディ(一九〇三—一九七三)であることは間違いない。

この皇子はオスマン帝国を離れてからイタリアを経てエジプトに移り住み、最後はフランスで死去した。文書から判明するかぎり、この皇子は一時期トルコ共和国に

おけるスルタン制の再興運動に関わっていた。一九四八年、マフムート・シェヴケト・エフエンディに対して建國が切望されていたパレスチナ国家の元首就任が懇請された。しかし、これを彼は拒絶したといわれる。⁽⁵²⁾

これ以前にも他の国の王に即位を懇望されたオスマン皇子たちがいる。たとえば、ブルハネッディン皇子の場合、一九一三年にアルバニアから、一九二一年にイラクからそれぞれ王位就任の要請を受けた。しかし、結果としてそれらの企てはいずれも成功しなかった。一九二八年にはメフメト・アビドやオメル・ファールクのようなオスマン皇子たちの名前がアルバニア国王の候補に挙げられた。しかし、おそらくは外交ルートを使ったトルコ共和国の必死の阻止工作が功を奏してこの構想は日の目を見ることがなかった。⁽⁵³⁾

これとは別に一九二五年、イギリスの支援を受け、アナトリア南東部および東部諸地域一帯を巻きこんで起こされたシェイフ・サイートの反乱に際して、ディヤルバクルのウル・ジャミーミではアブデュルハミトの息子メフメト・セリムをスルタン・カリフと見なし、その名において説教が行われた。⁽⁵⁴⁾ この反乱に実際のところメフメト・セリムがどの程度関与していたのか定かではないが、

このような事件が起きたことに驚いたトルコ共和国の指導層は、以後、オスマン皇族たちの動きを神経をとがらせて逐次、監視するのを怠ることがなかった。

一九三〇年代に入ると極東でもオスマン皇族の姿を目にすることができるようになる。この頃、押しも押されぬ地域大国となっていた日本は、オスマン皇族と関係をつけることに熱心に取り組むようになった。イスラームとカリフ制がとくに南アジアのムスリムに強い影響力を及ぼすと見た日本は、それを利用して大亜細亜主義の理想を実現することができると考えた。このためオスマン皇族に接近し、彼らを味方に引き込もうとした。これに関連する文書、文献には、直接的あるいは間接的に日本と関係があったと思われる四人の皇族の名前が挙げられている。すなわち、①メフメト・アビド・エフエンディ、②ジェマル・エフエンディ（ジェマレッディン）、③マフムード・エクレム・ルザ、そして④アブデュルケリム・エフエンディがそれである。⁽⁵⁵⁾ これについては以上のオスマン皇族のうち誰が、どのような形で日本と関係をもつにいたったのかを見ていくことが重要である。

東トルキスタン、現在の中国新疆ウイグル自治区において一九三一—一九三三年、トルコ系ムスリムによって

反乱がおこされた。この結果、一九三三年九月一〇日に東トルキスタン共和国、一九三三年一〇月一二日には東トルキスタン・トルコ・イスラーム共和国の建国が宣言された。⁽⁵⁶⁾多くの研究、文献によるかぎり、この蜂起から建国への過程において疑問とすべきところが残されているものの、日本の支援、関与があつたといわれる。またオスマン皇族がこれに関わつていたということも指摘されて⁽⁵⁷⁾いる。

②のジェマル・エフェンディ、すなわちジェマレッディンもその一人で彼については、東トルキスタン・トルコ・イスラーム共和国を率いるリーダーであつたムスタファ・アリー・ベイがペシャワールで行つた会見に関連記事を見つけることができる。これは一九三四年にベルリンで刊行された「イエニ・ミッリー・ヨル(新民族の道)」誌に掲載、収録されている。⁽⁵⁸⁾このインタビュの中でムフタファ・アリーは、オスマン皇族の一人で、当時インドに滞在していたジェマレッディンが東トルキスタンに来る予定があるかないかを質問された。これに対してムフタファ・アリーはこう答えたという。確かに自分はジェマレッディンを東トルキスタンに連れて行くため、彼をデリーまで出迎えに行つた。皇子自身はカシ

ユガルに行きを強く望んでいた。しかし、建国された東トルキスタン・トルコ・イスラーム共和国は、共和制を支持する派とスルタン制を支持する派の二つに分裂していた。このためジェマレッディンのカシユガル行きは不可能となり、その計画は沙汰止みになつたという。

実現はしなかつたものの、以上の話の中で注目すべきことは、オスマン皇族の一人が東トルキスタンで独立が宣言された国の支配者として招請されたという点である。スルタン・アブデュルアジズ一世を祖父にもち、その息子メフメト・シェヴケト・エフェンディを父とするジェマレッディン(一八九一—一九四七)についての情報は以上のように限られ、また彼が日本との関係でいかなる活動をしていたのか、今日まで依るべき確かな文書が見つかつてはいない。⁽⁵⁹⁾しかし、日本との関係をかすかに窺わせるオスマン皇族が東トルキスタンの支配者に収まろうとする事実があつたことは、今後、さらに究明すべき問題だと思われる。

日本の外交史料館に所蔵される外交文書には、③のメフメト(マフムート)・エクレム・ルザという名前の皇子が登場する。⁽⁶⁰⁾駐ボンベイ駐在領事が当時の有田外相に送つた一九三九(昭和一四)年二月一九日付け第四七六

七号文書がそれで、メフメト・エクレム・ルザのことを
Late Commander in Chief Turkish Forces Kashgar⁽⁶¹⁾とい
う肩書きで照会がされている。この人物は東トルキスタ
ンにおいて日本から多くの支援を受けて活動しており、
将来、新しい政府ないし国家が樹立される際は、情報収
集、その他の点できわめて有用な役割を果たすかもしれ
ないという報告がされている。

ここで重要なのは、この人物が誰で、彼を日本人に接
近させたのは誰かという点である。なぜなら私が調査し
た限りにおいてオスマン皇族の中にメフメト・エクレ
ム・ルザという人物は見つからないからである。⁽⁶²⁾もつと
もTurkey: Royal Family⁽⁶³⁾という見出しが付けられたイ
ギリス文書にはプリンス・エクレムという名が出てくる。
ただ、この人物がオスマン皇族であるかどうかは疑わし
い。

関係文書には往々にして誤りが見受けられる。たとえ
ば、イギリス文書においてプリンス・サーミという名で
言及される人物がそれである。ただし、この人物がプリ
ンスの称号を帯びることはおかしいと言わなければなら
ない。というのは、彼は実際にはダマト・フェリト・パ
シャの婿の子供であつたからである。彼の母は、スルタ

ン・アブデュルハミト二世の妹で、ダマト・フェリト・
パシャの前妻であつた。⁽⁶⁴⁾同じように別の文書もサーミ・
ベイの息子をプリンス・バハエッディン・サーミと書い
ている。⁽⁶⁵⁾これから(a)メフメト・エクレム・ルザは皇子
ではないがオスマン皇室と親類関係にあり、自らをプリ
ンスと名乗っていた、(b)プリンスでもオスマン皇族で
もない、(c)この人物がプリンスであることは間違いな
いが、事情があつて本当の名前を名乗らなかった、とい
う三つの可能性を想定することができる。

これとは別にプリンス・メフメト・エクレム・ルザと
いう名前で見られる人物がスルタン・アブデュルハミト
二世の妃サリハ・ナジエ・ハーヌムから生まれた息子メ
フメト・アビト・エフエンディ⁽⁶⁶⁾(一九〇五—一九七三)
であるという可能性も残されている。回想録に基づくあ
る研究によると、アビト・エフエンディは一九三五年以
降、日本の関係筋によつてトルキスタン皇帝の候補者と
して東京に招聘されたと伝えられている。⁽⁶⁷⁾しかし、アビ
ト・エフエンディ自身、回顧録を書いておらず、また書
くことも望まず、公文書も残されていないのでこの件が
事実であるかは依然として不明である。⁽⁶⁸⁾

これまで述べてきた三人以外にも東トルキスタンのト

ルコ・イスラーム国家建設に関与し、日本と直接関係を持ちながらその後押しを受けて東トルキスタン国家の皇帝に祭り上げられようとしたオスマン皇子が存在する。それがアブデュルケリム・エフエンディである。この皇子の父はスルタン・アブデュルハミト二世の息子セリム・エフエンディ、母はニリユフェル・ハーヌムであった。⁽⁶⁹⁾アブデュルケリム、エフエンディは、一九〇六年ユルドウズ宮殿で誕生した。ガラタサライ・リセで学んだ後、陸軍士官学校に入学するが、在学中にオスマン帝国が滅亡、トルコ共和国成立後の皇族追放によって国を離れることを余儀なくされた。父親と一緒にダマスカスからバイルート、アレppoへ転々とした生活を送り、一九三二年インドに渡った。⁽⁷⁰⁾一九三三年日本から招請を受けて東京に行き、その後一九三五年アメリカに渡るが、そこで謎の死を遂げた。最後にこの人物を取りあげながら一九三〇年代前半における日本とトルコとの関係史について考えていくことにしたい。

3 トルキスタン皇帝アブデュルケリム皇子

アブデュルケリム皇子はトルコを離れてからバイルートのガディール街においてマロン派のキリスト教徒で後

にムスリムに改宗することになるニメト・ハーヌムと知り合い、一九三〇年二月二四日アレppoで結婚した。⁽⁷¹⁾彼の父はこの結婚に反対であった。このためアブデュルケリムは、新妻を連れてダマスカスに居を移した。しかし、そこでの生活は苦しく二度も自殺を図ったが、いずれも命は取り留めた。⁽⁷²⁾自殺の原因は、結婚に対する父親の冷淡さ、それに由来する生活上の困窮であった。一九三〇年に長男、一九三二年に次男が誕生するが、ダマスカスで発刊されていた新聞サウトウル・アフラル紙によると、一九三三年、それまでもさまざまな面で援助を受けていたハイデラバード藩王を頼ってインドに赴いた。⁽⁷³⁾

この旅はハイデラバード藩王の息子と結婚していたデユリシエフヴァル(すでに述べた最後のカリフ・アブデュルメジトの娘)とカリフ制の復活をめざすヒラーフ・アト運動の指導者たちの招きにより実現したと思われる。アブデュルケリムはインドに暫く滞在するが、イギリス文書によると最終的にはインド総督府により国外に退去させられた。⁽⁷⁴⁾その理由は、彼がかつてオスマン帝国においてパン・イスラーム主義を唱導していたスルタン・アブデュルハミト二世の孫であり、このことがインドにおいてヒラーフ・アト運動を再燃させるのでないかという懸

念がイギリスにあったからである。また、アブデュルケリムはインドのムスリムあるいは別の人たちを通じて日本との関係を深めているのでないかというイギリス側の疑念もあった。この警戒心が彼の追放につながったのである。

アブデュルケリムが誰を通じて日本人と関係をつけるようになったのかについては、残された文書が少ないので解明するのが容易ではない。ただ、百科事典メイダーン・ラルースの「ムフシン・チョパンオール」の項目には、彼を通じてアブデュルケリムは日本人と関係を持つようになったと記している。⁽⁷⁵⁾ この記事はとくに出所を明らかにして書いたものでなく信憑性も確かでないが、以下においてはムフシン・チョパンオールの生涯を簡単にたどりながら、彼とアブデュルケリムが来日するに至る事情について触れていくことにしたい。

ムフシン・チョパンオールはアナトリア中央部の町ヨズガト周辺で勢威を振るう名族チョパンオール家の出身である。父親はメフメト・サドウクといい、宮殿に出仕する将校であったが、バルカン戦争が勃発すると志願して出征、そこで命を失ったという。⁽⁷⁶⁾ イスタンブルのウシユクダルに生まれたムフシンは、父親の職務の関係から

幼少の一時期をオスマン帝国の宮殿で皇子たちと一緒に過ごし、割礼もそこで行った。すでに述べたスルタン・アブデュルハミト二世の息子メフメト・アビト、孫のアブデュルケリムとも古くからのなじみで学友であった。

祖国戦争期に起こされたチョパンオールの反乱の頃、ムフシンはパリで建築学を学んでいた。しかし、間もなくして建築学科を中退、新聞学を学び直し、帰国後は教職についた。ただ、それも長く続かず、国外に出て新聞記者を始め、ルモンド紙など外国紙に記事を寄稿した。⁽⁷⁷⁾ トルコを出国してからのムフシンは、おそらくパリに居を定めながらアメリカ、アラビア半島、アフガニスタンなど世界各地を巡り歩く生活を送っていたものと思われる。

日本との関係は、おそらくパリの日本大使館を通じてできたと考えられる。一九三二年八月、滞在中のアフガニスタンにパリから来信があり、これにしたがってムフシンは東京に向かった。外交史料館所蔵の文書に残されている神奈川県知事の報告によると、ムフシンは一九三三（昭和八）年二月二一日午前一時、香港発の船で神戸に上陸した。⁽⁷⁸⁾ また同じ文書は、ムフシンがイスタンブルで発行されていた半官半民の新聞アクシャム紙の特派

員として来日し、東アジアと満州を視察するとともに日中問題について調べ、それを記事にしてトルコに送るためその便宜と許可を求めてきたと伝えている。⁽⁷⁹⁾ 同文書にはムフシンが神奈川県知事に対して五月に満州から日本に戻ると通知したことも記されている。またそこにはすでに触れた東京回教団の団長ムハンマド・アブドルハイ・クルバンアリーの名前も出てくる。ムフシンはこのクルバンアリーの義妹と後に結婚するが、彼がクルバンアリーと何時、どのようにして関係を持つようになったのかは残念ながらつまびらかにできない。

一九三三年五月は、日本とトルコ世界との関係において記憶に残る重要な時期であった。ムフシンの他にアブデュルケリムが五月二四日に東京に到着したからである。⁽⁸⁰⁾ 同じ年にアヤズ・イスハキ⁽⁸¹⁾とアブデュルレシト・イブラヒム⁽⁸²⁾も東京にやって来た。とくにイスハキとイブラヒムが時期を合わせて来日したことは興味深い。イスハキの日本訪問の目的は、極東のトルコ系タール人たちを結集させることにあった。これに対してイブラヒムは、トルコでの事実上の軟禁生活を逃れてパン・イスラーム主義運動を日本において再び組織するため招請を受けて東京にやって来た。

トルコ系タール人の両巨頭の来日は以上のようにその意義をまとめることができるが、ここでは是非とも考えておかなければいけないことは、すでに述べたアブデュルケリムを日本側で誰が呼び、資金的な援助をおこなっていたかという問題である。この点に関しては予備役の海軍中將であった小笠原長生の存在が鍵であるという田中宏巳の指摘が重要である。⁽⁸³⁾ それによると、アブデュルケリムの日本冒険旅行は、東京在住のトルコ系タール人の指導者ムハンマド・アブドルハイ・クルバンアリーが一九三三年二月二八日、小笠原長生提督をアブデュルケリムの秘書と自己紹介する人物と一緒に訪問したことで始まった。⁽⁸⁴⁾ クルバンアリーと秘書の訪問のねらいは、小笠原から彼らが立てた行動計画に対して援助を得ることであった。この計画とは、もともと日本が満洲でおこなったことをなぞるものであった。その目標は、東トルキスタンでの蜂起によって樹立される国家の元首にオスマン皇族のアブデュルケリムを即位させることであった。この訪問の後、クルバンアリーは小笠原のもとを頻繁に訪れるようになる。⁽⁸⁵⁾ 小笠原日記には四月一八日夜、クルバンアリーがボリシンという名前の人物と一緒に訪ねてきて、ある人物の存在について話し合ったことが書か

れている。ある人物とは多分、アブデュルケリムのこと
で、当時平沼騏一郎の私設秘書を務めていた実川時次郎⁽⁸⁶⁾
によると、アブデュルケリムの来日と一年間の滞在に要
する費用として毎月千円の資金が必要だということも話
し合われたようである。

ところで、ここで名前が挙がっているボリシンとはム
フシンという名の音が誤って聞き取られ、書き留められ
た可能性が高いと考えられる。日本人の発音ではムフシ
ンはボリシンとして受取られることは十分にあり得るか
らである。この結果ムフシンがボリシンという形で書か
れてしまったと思われる。小村不二男の研究によると、
小笠原を訪ねたこのボリシンとクルバンアリーの計画に
必要な資金を実際に提供したのは、小笠原自身でなく大
阪商船の堀社長と政友会の影の実力者森恪であったとい
う。⁽⁸⁷⁾

この後、計画にしたがってボリシン（ムフシン）はオ
スマン皇子のアブデュルケリムをシンガポールで出迎え、
五月一八日には神戸港に到着するという予定で日本を立
った。小笠原はこれをうけてこの重要な情報を陸軍参謀
本部の小畑敏四郎に電話で知らせている。⁽⁸⁸⁾五月中旬神戸
に到着したアブデュルケリムは二一日、東京に到着する。

万歳を三唱しながら彼を出迎えたのは、衆議院議員、貴
族院議員、陸海軍の将官、国粋主義系の学生など全部で
百―百五十名からなる人たちであった。朝九時東京に着
いたアブデュルケリムは警官に護衛されながらホテルで
旅装を解き、来客に接見した。⁽⁸⁹⁾その後明治公園の近く用
意された家に滞在した。⁽⁹⁰⁾東京滞在中は数々の史跡を訪れ、
有力者たちと面談し、頻繁に東京在住のトルコ系タター
ル人たちと会った。⁽⁹¹⁾

この間、外国新聞とくにソ連において、アブデュルケ
リムの日本訪問、東トルキスタン共和国が建国された際
の国家元首就任についてのニュースがたびたび報じれる
ようになった。しかし、彼はこのような報道で伝えられ
る内容をきっぱりと否定し、『ヤンギ・ヤポン・モフビ
リ（新日本通報）』誌において、次のような談話を発表
している。

「六ヶ月前、私は世界漫遊をめざす旅に出立し、東
京にも足を止めるに至った。私の日本訪問については
嘘や根も葉もない噂が飛び交っているように思われる。
たとえば、モスクワで出されている『プラウダ』紙は、
日本がパン・イスラーム主義運動の中心になり、私が

中国領東トルキスタンを支配しようと狙っていると報じている。しかし、これらの報道は身命に誓って事実無根であり、すべて根も葉もない悪意から出ている。私はトウラン民族に属するトルコ民族であるのでトウラン主義者と親密にするのは当然である。何のやましいところもない。私は世界旅行の途次にたまたま日本に立ち寄ったにすぎない。日本を見物し、エルトゥール号事件で遭難したトルコ人の慰霊碑に詣で、さらに明治天皇が巡幸されたところを訪ねるためにやって来たのだ。東トルキスタンで起きていることに関わるつもりは毛頭ない。⁽⁹²⁾」

このような談話を発表したにもかかわらずアブデュルケリムは、『パレスチナ』というアラブ新聞の伝えるところによると、七月に日本人将校三名、ムフシン・チョパンオールと連れだつて満洲に渡り、要人たちと面談した。九月には日本人将校二名が飛行機で東トルキスタンに入ろうと図つたが、中国当局によつて阻止された。将校たちのこのような計画を中国の新聞は、アブデュルケリムが東トルキスタンに入るための準備工作と見ていた。⁽⁹³⁾ アブデュルケリムは、自分と日本に対して向けられる

批難に直面して窮地に立たされた。彼に対する警察の執拗な尾行・監視から守り、千駄ヶ谷にある私宅に匿つたのは、すでに渡航・滞在費用の面倒をみていた政友会の森恪であつた。⁽⁹⁴⁾ アブデュルケリムの日本滞在は、一年間の予定であつたが、一九三三年九月二日、ついに東京を離れることを余儀なくされた。⁽⁹⁵⁾ 一九三三年十一月一日付け『新晩報』紙は、「ムスリムの皇子」、すなわちアブデュルケリムが日本から上海にやつて来てイラン人経営のホテルに投宿したと報じた。一二月イギリス情報部将校シヨーンバーク大佐は、アブデュルケリムが東トルキスタンに入る予定だと本国に打電している。⁽⁹⁶⁾ 翌一九三四年三月二三日のタス通信のニュースは、アブデュルケリムが上海から東トルキスタンに行つたと報じた。しかしながら、三月二八日の中国ニュースによると、アブデュルケリムは依然として上海に滞留しており、日本人は彼を東トルキスタンをめぐるグレートゲームにおいて傀儡とすることはできないだろうと伝えた。⁽⁹⁷⁾

このように当時のメディアは日本出国後のアブデュルケリムの動静について憶測を交えながら情報を流していたが、この後も彼をめぐる報道は次のような形で続いた。四月六日付けイギリスのタイムズ紙は、アブデュルケリ

ムが知られざる場所に向かつて上海を離れたと伝える⁽⁹⁸⁾。

これに続けてイギリスの新聞は、ソ連軍が西トルキスタンにおいて大規模な軍事演習を行っていると報じた⁽⁹⁹⁾。これには東トルキスタンにおける不穏な動きをソ連が牽制するという意図がこめられていたと思われるが、軍事演習に先立つ四月三日、日本当局はアブデュルケリムと日本が関係があるという噂は事実無根であるという声明を出した⁽¹⁰⁰⁾。五月初旬の報道によると、アブデュルケリムは東トルキスタンに樹立されたトルコ・イスラーム共和国首班サビト・ダモツラーに特使を派遣した⁽¹⁰¹⁾。トルコの新聞も東トルキスタンで起きている一連の蜂起、アブデュルケリムの動きに対して並々ならぬ関心を寄せていた。しかし、トルコの新聞のこの件に関する姿勢は、終始、慎重であつた⁽¹⁰²⁾。

一九三四年六月一二日、東千人⁽¹⁰³⁾がホータンに侵攻したことによつて東トルキスタン・トルコ・イスラーム共和国はあつけなく潰滅した⁽¹⁰⁴⁾。これにともなつてアブデュルケリムの計画はもろくも崩れ、水泡に帰した。極東に馳せた彼の夢はこのような結末に終わり、再び森恪の援助を得てアメリカ合衆国へと旅立っていった⁽¹⁰⁵⁾。しかし、そこが終焉の地にならうとは予想だにできないことであつ

た。

一九三五年八月四日付けのニューヨークタイムズ紙は、「オスマン皇子、ニューヨークで命を絶つ」という見出しを掲げてアブデュルケリムが、ブロードウェイ43番通りにある安宿Ⅱホテル・キャデラックの一室で自殺したと報じた。アブデュルケリムの遺体は、足を下に垂らすかたちでベッド横たわっていた。右頭部には32口径の拳銃で撃ち抜いたと思われる弾の跡があり、傍らには拳銃が落ちていた。ポケットにはわずか75セントしか残されていなかった。アブデュルケリムは、自殺する数時間前に部屋に入り、朝五時に起こしてくれるようにというメモを残していた。しかし、電話をしても応答がなく、不審に思ったホテルの従業員が部屋に入つて、はじめて冷たくなつてゐるアブデュルケリムの遺体があることに気づいたのである⁽¹⁰⁶⁾。

アブデュルケリムは、一九三四年九月ニューヨークに来てからしばらくの間カーディル家の世話をうけながら一緒に暮らしてゐたと思われる。なぜ自殺したのか、その動機についてはニューヨーク市警のヴァレンティン警部に宛てて書かれたトルコ語の手紙から推察することができる⁽¹⁰⁷⁾。残された遺書ともいふべきメモには、オスマン

家の再興と東トルキスタン皇帝になる夢を実現すべく奔走してきたが、疲れから病に伏すようになった。最後に一縷の望みをかけてある裕福な女性に結婚を申し込んだがそれも断られ、後は自ら命を絶つこと以外道が残されていないということが走り書きにされていた⁽¹⁰⁸⁾。

二十九歳で命を絶った若き皇子アブデュルケリムの遺体は、オスマン帝国時代にトルコ領事館で勤務したことのある弁護士ダッドリー・F・コスターによってベルヴェュー・モルグに移された。コスターは、新聞社に対して行った記者会見でアブデュルケリムの父親セリムから電報が送られてきたことを披露した。それには皇子にふさわしい葬儀と柩の搬送を執り行つて欲しい、そのためにはいかなる出費も惜しまないという旨の依頼が記されていた。また、これとは別に自殺する数時間前、フォード自動車会社からアブデュルケリム宛に手紙が送られ、彼を同社の上海および東トルキスタンの代理人に任ずるという通知があつたことも明らかにされた⁽¹⁰⁹⁾。

葬儀にはアブデュルケリムの従兄弟オルハン、元トルコ領事シャーミール、画家ベツリデ・ユースフなどの友人、知己が参列した。祈りはマンダレイ導師によつて執り行われ、葬儀は二時間続いた。緑と白のリボンに包ま

れた棺は、九月七日、船でバイルートまで搬送され、そこで埋葬された⁽¹¹⁰⁾。

アブデュルケリム自殺のニュースはトルコの新聞にも掲載されたが、詳細については触れられなかった。ウルス紙は「狂気の沙汰とはいえない。アブデュルハミトの孫が自殺」と伝え⁽¹¹¹⁾、ジウムフリエツト紙は「元皇子アブデュルケリム、ニューヨークで自殺。結婚を望んだ女性の資産を元に軍隊を編成し、トルコを征服しようともくろんでいた」と報じた⁽¹¹²⁾。

若き皇子の死亡をめぐつてはさまざまな憶測がされている。ユルマズ・オズトウナは、アブデュルケリムがアメリカの諜報機関から脅迫を受けていたことが原因だと指摘する一方、ソ連諜報機関員が手を下して彼を殺害した可能性も否定できないとしている⁽¹¹³⁾。これとは別にアブデュルケリムは日本人によつて殺害されたのだという見方もされている。二〇〇一年五月、ヒュリエツト紙のコラムニストとして知られるムラト・バルダクチュとイスタンプルにある彼の自宅でおこなったインタビューの際に、そこで知り合ったオスマン皇族出身のビュレント・オスマンも元皇族たちの間ではアブデュルケリムは日本人によつて殺害されたのだということがまことしやかに

囁かれていると私に語ってくれたことがある。^(四)

二〇〇二年、私はニューヨーク市警に対してアブデュルケリムの死亡検案書と関係文書の閲覧を求める手紙を送った。しかし、市警からの回答は、すでに長い時間が経過しており該当書類を見つけることはできないのとこのことであつた。死亡検案書や関係文書を発見することができれば、弾痕や目撃証言からアブデュルケリムの死亡原因についてより確かな考えを明示できるかもしれない。

おわりに

一九三三年五月二日から九月二日まで約四ヶ月間にわたるアブデュルケリムの日本滞在は、東トルキスタンをめぐる日本の傀儡国家構想と密接に関わっていた。すでに日本は一九三二年満州国を建国し、翌一九三三年には内蒙古を中心に蒙疆政権を成立させた。そしてそれに続けて日本は、一九三一年以来新疆省で起こされていた中華民国からの分離独立をめざすムスリム反乱を利用してそこに第三の傀儡国家をつくろうとしていた。こうしたなか東トルキスタン国家が樹立された暁に「トルキスタン皇帝」として即位させるべく白羽の矢が立てられたのが、オスマン皇族に連なるアブデュルケリムであつた。

た。

この構想がどの程度具体化され、現実性を帯びたものであるのか、史料は必ずしも多くを語っていない。日本政府が直接この構想に関与したという証拠も今のところ発見されていない。しかし、小笠原長生、小畑敏四郎といった海軍、陸軍の有力者、また森恪に代表される政治家がクルバンアリー、ムフシン・チョパンオウルのようなトルコ系ムスリムとの接触を通じてアブデュルケリムの来日に熱心に動いたという事実には、日中戦争期における日本の東トルキスタンに対する関心の深さ、そこに由来するイスラーム政策の一端がよく現れている。

「トルキスタン皇帝」に擬せられたアブデュルケリムは、日本が対イスラーム政策を満洲、内蒙古からさらに東トルキスタンへと広げていくにあたって役立つ人物と考えられた。彼は血統という点から言うと、すでに述べたように一八七〇年代後半以降パン・イスラーム主義政策を積極的に進めたオスマン帝国のスルタンⅡカリフ・アブデュルハミト二世の孫であつた。この祖父の名声は、時代が下り一九三〇年代になっても東トルキスタンのみならずイスラーム世界全体においてなお人々の記憶に強く残っていた。日本はその血と威光を引き継ぐアブデュ

ルケリムを押し立てながらムスリムの広汎な支持を集めていこうとしたのである。

ただ、こうした日本の構想は東トルキスタンに重大な利害を有するソ連とイギリスのみならず、トルコ共和国にも強い警戒心を起こさせた。ケマル・アタテュルクは、新生トルコを建設していくにあたって政治イデオロギーの面ではオスマン帝国末期に鼓舞されたパン・トルコ主義を放棄し、アナトリアという地域に根ざす国づくりを進めていた。彼の頭の中にはもはや、東トルキスタンを含めたトルコ系諸民族の世界を政治的に統一するという野心はまったくなかった。しかし、アブデュルケリムを「トルキスタン皇帝」に擁立して独立国家を樹立しようという日本の構想は、すでに一九二四年トルコで廃止されたカリフ制をもう一度復興させようという運動に広がっていく恐れがあった。これにトルコは深い警戒心を抱いたのである。

こうした懸念は、トルコに日本を牽制する政策を引き起こさせた。トルコにとって気がかりだったのは、アブデュルケリムの日本招請計画に深く関わる在日タタール人コミュニティの指導者クルバンアリー存在であった。トルコは彼の影響力を削ぐと、一九三三年に日本を訪

問したアヤズ・イスハキーに対して強い肩入れを行い、タタール人ネットワークの分断を図ろうとした。これまでにクルバンアリーとアヤズ・イスハキーの対立は、タタール人コミュニティ内部における主導権争いとして論じられてきた面が強いが、アヤズ・イスハキーの背後にはトルコの影があり、その牽制政策の一環として見ていく必要があるように思われる。

また、一九三三年東トルキスタン共和国が瓦解すると、その関係者の多くはパミール高原を越えてアフガニスタンに亡命した。その際、そこに駐在していたトルコ大使は助けを求めてきた亡命者に対して今後一切、日本に協力する行動を慎むよう勧告したという。これによく示されるように、トルコは東トルキスタンにおいて日本が進めようとするイスラーム政策に対して強い警戒心を持ち、これを阻止する対抗策をめぐらしていた。これは、トルコと日本との間における中央アジアをめぐるミニ・グレートゲームといえるものであるが、アブデュルケリムの来日問題はこうしたトルコと日本との間の国際関係の観点からとらえ直していかなければならず、今後の課題としたい。

註

- (1) R.H.P. Mason, *A History of Japan*, Tokyo, North Melbourne 1973, p.258.
- (2) 徳川幕藩体制から明治新体制へ移行についての包括的な研究については Benedict Anderson, *Hayati Cemattler*, Metis Yayınları, 1983, s. 110-115; Janet E. Hunter, *Modern Japonya'nın Doğuşu*, İmge Yayınevi, İstanbul 2001 が詳しい。トルコと日本の近代化の比較については Robert E. Ward & Dankwart A. Rustow (ed.), *Political Modernization in Japan and Turkey*, Princeton University Press, 1964 を参照。
- (3) Selçuk Esenbel, "Japanese Perspectives of the Ottoman World," *The Rising Sun and the Turkish Crescent*, İstanbul 2003, p.29.
- (4) 日露戦争については Public Record Office FO 371/477 *The Official History of the Russo-Japanese War*, Vol.1, 1908 が外国人研究者の利用のしやすさという点から有益である。
- (5) なお、約二億二千万人というイスラーム世界の人口は、Office of Strategic Services, Research and Analysis Branch, *Japanese Infiltration among the Muslims throughout the World*. O.S.S R & A No: 890, p. 2, 1943 によっても断つておきたい。
- (6) Office of Strategic Services, Research and Analysis Branch, op.cit., iii.

(7) 日本の中東戦略と直接結びつくわけではないが、一九三七年七月九日、アフガニスタン、イラン、イラク、トルコはサーダーバード条約を結んで相互安全保障体制を敷いたことはよく知られている。

- (8) Office of Strategic Services, Research and Analysis Branch, op.cit., p.4.
- (9) この問題はにわかに信じがたいことだが、かつてオスマン帝国のトルコ人のあいだでそれなりに信じられていたことである。この点については "Osmanlı İmparatorluğu Teskilat-ı Mahsusa Reisinin Gizli Dosyalar," *Tarih Selevi-yor*, Mart 1965, sayı 14, Nisan 1965, sayı 15, c.III, s. 1226-1229, 1255 を参照。
- (10) インドのイスラーム教徒の間で民族主義が強まること、日本がインドに影響力を行使する妨げになりえるという点も看過しえない。
- (11) この点については次の論文を参照。İ. Süreyya Sırma, "Sultan II. Abdülhamid'in Çin Siyasetine Dair Bir Vesika", *IX. Türk Tarih Kongresi*, c. II, Ankara, 1988, s.1111-1116; "Sultan II. Abdülhamid'in Çin'e Gönderdiği Enver Paşa Heyeti Hakkında Bazı Bilgiler", *Atatürk Üniversitesi İslami İlimler Fakültesi Dergisi*, Ankara, 1980, s.159-183; "II. Abdülhamid'in Çin Müslümanlarını Sünni Mezhebine Bağlama Gayretlerine Dair Bir Belge", *İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Tarih Dergisi*, İstanbul, 1979, s. 559-562; "Sultan II. Abdülhamid'in Uzak-Doğu'ya Gönderdiği Ajana Dair", *Birinci Milli Türkoloji Kongresi*, İstanbul,

1989, s. 323-325.

- (12) 日本のイスラーム政策において中国が占める位置について Office of Strategic Services, Research and Analysis Branch, *Japanese Infiltration among Muslims in China*, O.S.S.R & A 890.1, 15 Mays 1944 に記述が見られる。実際の日本の動きについては U.S.M.I.D, Military Intelligence Department, *Records of the Military Intelligence Division Regional File Relating to China 1922-1944*, Microfilm, Roll 13. 外務省外交史料館『在本邦に於ケル宗教及布教関係雑件 回教関係』第二巻、五四-六〇頁。同じような文書として *Pan-Islam* のタイトルでイギリス側のレポートが Public Record Office, F.O 371/28032, *Japanese Intentions in Moslem Countries*, 21 June 1941 としてある。
- (13) ロシアのイスラーム教徒に対して日本が文化団体を使って影響力を及ぼそうとしたことについては、Office of Strategic Services, Research and Analysis Branch, *Japanese Infiltration among Muslims in Russia and her Borderlands*, O.S.S.R & A 890.2, August, 1944, p.33-37; Public Record Office, F.O 371/28032, *Japanese Intentions in Moslem Countries*, 21 June 1941 参照。
- (14) Office of Strategic Services, Research and Analysis Branch, *Japanese Infiltration among the Muslims throughout the World*, O.S.S.R & A 890, 1943, p. 6.
- (15) 大亜細亜主義とはアジアがヨーロッパ列強から解放されて一つ屋根の下に統一しようという思想である。これにもとづいて活動した頭山満、内田良平、黒竜会、その

他の団体にについては U.S.M.I.D, Military Intelligence Department, *Leading Reactionary Groups*, Enclosure no. 2, Despatch no. 588, pp.1-4 に簡単な記述が見られる。

- (16) アブデュルレシト・イブラヒムはアブデュルハミト二世の時代に日本とオスマン帝国との間である種の非公式な使節として活動した。彼の生涯、活動については Ismail Türkoğlu, *Sibiryalı Meşhur Seyyah Abdürreşid İbrahim, Türkiye Diyanet Vakfı Yayınları*, Ankara 1997 が最も詳しく包括的な情報を提供してくれる。Mehmed Paksu (çev.), *İslam Dünyası ve Japonya'da İslamiyet*, İstanbul, 1987 はイブラヒムのオスマン語版からの現代語訳。Ertuğrul Özalp (çev.) *Alem-i İslam ve Japonya'da İslamiyetin Yayılması*, İstanbul 2003 は、パクスーに続く最新のトルコ語訳。小松香織・久男訳『ジャポニヤ』第三書館一九九一年は日本滞在時の部分の邦訳。坂本勉「山岡光太郎のメッカ巡礼とアブデュルレシト・イブラヒム」(池井優・坂本勉編『近代日本とトルコ世界』勁草書房、一九九九年所収)、坂本勉『イスラーム巡礼』岩波書店、二〇〇〇年、Tsutomu Sakamoto, "The First Japanese Hadji Yamaoka Kotaro and Abdürreşid İbrahim", in Selçuk Esenbel and İnaba Chiharu (ed.), *The Rising Sun and the Turkish Crescent*, Bogaçiçi University Press, İstanbul, 2003 は明治末期、最初に来日した後、山岡光太郎と連れだってメッカ巡礼に行った際の旅行について考察している。なお、もともと帝国ロシア臣民であったアブデュルレシト・イブラヒムは、一九一二年オスマン帝国の国籍を取得した。

しかし、一九三五年八月八日、後述するようにトルコ共和国から国籍を剥奪された。

- (17) 犬養毅は周知のように一九三二年五月一五日の事件で凶弾に倒れた。

- (18) Abdürreşid İbrahim (çev. Ertuğrul Özalp), *Alem-i İslam ve Japonya'da İslamiyetin Yayılması*, İstanbul, 2003, s. 614-619; Selçuk Esenbel, "*İslam Dünyasında Japonya İngesi: Abdürreşit İbrahim ve Geç Meiji Dönemi Japonları*", *Toplumsal Tarih*, sayı 19-20, 1995, s. 23.

- (19) 中央アジアにいるトルコ系諸民族に比べてより教育があり、裕福であったタタール人は商業に従事し、トルキスタン地方に広くコミュニティをつくり、日本に近いところに住んでいた。このことが容易に日本に対して彼らが影響を与えることができた要因になった。

- (20) Public Record Office, F.O 371/3287, p.440 は一九一八年八月一三日付けの秘密報告。Public Record Office F.O 371/4005 は一九二〇年六月二三日付けの情報局の報告。

- (21) Office of Strategic Services, Research and Analysis Branch, *Japanese Infiltration among Muslims in Russia and her Borderlands*, O.S.S. R & A 890.2, August, 1944, pp. 80-82.

- (22) Mahmut Tahir, "Haylar'daki Türk-Tatarların Dini ve Milli Cemiyeti", *Kazan*, no: 11, Yıl IV, 1974, s. 35.

- (23) İnevettullah Akçora, "Mukden Şehrindeki Tatarların Dini ve Milli Cemiyeti", *Kazan*, no: 7-8, Yıl II, 1972, s. 97.

- (24) Mahmut Tahir, "Mançurya Şehrinde Türk-Tatar Cemiyeti", *Kazan*, no: 16, Yıl V, 1975, s. 25.

yet'i", *Kazan*, no: 16, Yıl V, 1975, s. 25.

- (25) Mahmut Tahir, "Uzak Şarkta Dini-Milli Cemiyetlerimiz", *Kazan*, no: 14, Yıl V, 1975, s. 41.

- (26) Olga Bakich, "Emigre Identity: The Case of Harbin," *The South Atlantic Quarterly*, 99-1, 2000, pp.51-73; Elena Chernoluskaia, "Religious Communities in Harbin and Ethnic Identity of Russian Emigres", *The South Atlantic Quarterly*, 99-1, 2000, p.79-96.

- (27) 日本に住みつくようになったトルコ系の人たちについての研究は、さほど多くはない。そうした研究のなかで指摘されていることは、一九二〇年代以降トルコ系の人々が日本にやって来たということである。しかし、横浜にある外国人墓地にははつきりとした来歴は記されていないものの一九一九年に亡くなったバシユキール・トルコ人の墓がある。これは私が二〇〇一年に日本で調査をした際に見つけたものである。こうしたことからトルコ系の人たちの来日は一九一九年、あるいはそれ以前にさかのぼることができると考えられる。

- (28) ムハンメド・アブドウルハイ・クルバンアリー Muhammed Abdulhay Kurbanali (Kurbanaliyev 1889-1972) は帝政ロシア領オレンブルグ州内のチェルヤビ (Çelyabinsk) に生まれた。バシユキールのバルン・タブン族の出身で、父親のウベイドウツラー・インヤン Ubeydullah İsan は、ミヂヤク村 Midyak köyü 出身の裕福なモッラーであった。来日する前はバシユクルディスタンにおいて帝政ロシアのツァーリを支持する王党派として民

族主義者たちに対して敵対的な行動をとった。一門と彼自身が有する宗教的声望によって周囲から私兵を集めて軍を編成し、コルチャーク將軍の反革命軍に身を投じた。後にアタマン・セミョーノフの麾下に入り、極東地方に転戦した。父親とその息子は、一九一七年五月十一日にモスクワで開かれた全ロシア・ムスリム・クリルタイで読まれた糾弾書において民族的、宗教的背信を問われ、断罪された。これらの事情とクルバン・アリーについては以下の書を参照のこと。Zeki Velidi Togan, *Hatıralar*, Ankara, 1999, s. 142, 172, 176, 189, 190; Mahmut Tahir, “Muhammed Abdulhay Kurbanali”, *Kazan Dergisi*, Yıl III Sayı 9, 1972, s. 50; İhsan İlgar, *Rusya'da Birinci Müslüman Kongresi*, Ankara 1990, s. 505-506.

- (29) Office of Strategic Services, Research and Analysis Branch, *Japanese Infiltration among Muslims in Russia and her Borderlands*, O.S.S.R & A 890.2, August, 1944, p.26.

- (30) イディル・ウル問題のリーダーであるアヤズ・イスハキが極東にやってくると、クルバンアリーの指導性にかげりがあらわれるようになる。この点については松長昭「アヤズ・イスハキと極東のタタール人コミュニティ」(池井優・坂本勉編『近代日本とトルコ世界』勁草書房、一九九九年所収)一二二―一二六七頁を参照。

- (31) 外務省外交史料館『在本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件 回教関係』第一巻、一二二頁。この史料を読むにあたっては当時、慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程

在学中の石原賢一氏、同修士課程学生稲葉沙智子氏、高丸洋亮氏の助力を賜った。心からお礼を申し上げる。なお、クルバンアリーは、後になってこの建物を売却しようとするが、これに反対するタタール人たちとの間で訴訟問題が起こされた。

- (32) 開校式に列席した来賓のなかには総理大臣犬養毅の他に内務、法務の元大臣、二〇人ほどの陸海軍の将校、三〇人にのぼる国会議員がいた。また日本の国粋主義者の父といえる頭山滿もこの開校式に列席した。詳しくは *To'kyo'da Mekteb-i Islamiye'nin On Yillik Hatırası İçin Düzenilmiş Resimler Mecmuası*, Tokyo 1937 を参照された。

- (33) トルコから購入されたアラビア文字の活字は、箱に詰めて日本に送られた。支払わなければならない関税が相当額に上ったので、犬養毅は会期中の国会に申請してその一部を補助する承認を取りつけた。またこれとは別に印刷機を購入する代金として当時の金で五〇〇円が寄附された。このあたりの事情については Mahmut Tahir, “To'kyo'da Matbaai Islamiye”, *Kazan*, sayı 16, Yıl V, 1975, s. 16-17 に記述がある。

- (34) 書籍とともに宣伝目的をもって絵葉書、地図が印刷され、海外に送られた。印刷所で刷られた書籍、手紙、請求書、絵葉書、送り状は、現在、ほとんど個人の私蔵に帰し、公開されていない。イスラーム印刷所 *Matbaai Islamiye* がつくられるまで極東におけるトルコ系住民の社会的、文化的な中心は、満州のハルビンであった。極東における最初のトルコ・タタール印刷所はこの町で設立

され、Yuvak Şark, Min(Bin) Yıl Mesidi, Beyrem Nuru, Çatır
といった新聞が多くの本とともに印刷され、トルコ
タール社会のなかで有用な情報を提供していた。

- (35) 内務省警保局編『外事警察概況』第一巻、不二出版、
一九八七年、一五九頁。

- (36) 神戸モスクの開堂については外務省外交史料館『在本
邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件 回教関係』第一巻、二
九六―二一六頁、および The Kobe Muslim Mosque Report
1935-36, 30 th April 1936; *Japan Chronicle*, 12 th October
1935; Public Record Office, British Foreign Office, FO.
371/19349, 1935, p.154-201 を参照。

- (37) 開堂式に際して行われた祝辞については The Kobe
Muslim Mosque, *A Souvenir Booklet Issued in Commemo-
ration of the Opening Ceremony of the Kobe Muslim
Mosque*, October 1935 に紹介がある。

- (38) Mian Abdul Aziz は、一九〇六年に設立された全イン
ドームスリム連盟の第23代会長である。彼は神戸モスク
の開堂をきっかけにイスラームが日本の庇護のもとで新
たに発展することを期して *The Crescent in the Land of
the Rising Sun*, Blades East & Blades LTD, 1939 を著した。

- (39) 内務省警保局編『外事警察概況』第三巻、不二出版、
一九八七年、一五〇頁。日本政府は直接ではなかったが、
間接的に財政支援を行い、モスク建設に協力した。たと
えば三菱財閥傘下の十一の企業に働きかけてそれぞれ当
時一万円の寄附を募り、集められた総額十一万円にのぼ
る寄付金はクルバンアリーに渡され、工事費用にあてら

れた。これについては外務省外交史料館『在本邦ニ於ケ
ル宗教及布教関係雑件 回教関係』第二巻、二一〇四頁、*Re-
cords of The U.S Department of State Relating to the In-
ternal Affairs of Japan 1930-1939* SJ.1 Decimal File 894,
894.404/16, *Japan and Mohammedans*, 22. June. 1938;
Abu Bakr Morimoto, *Islam in Japan, its Past, Present and
Future*, Tokyo, 1980.

- (40) Public Record Office F. O 371/28010, *Positions of
Mosques in Japan*, 9 April 1941; 外務省外交史料館『在本
邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件 回教関係』第二巻、一
八九頁。

- (41) ただし、この法律の適用から *Kadimehendileri* (皇帝
の妻) *Hannusultan çocukları* (皇帝の皇子) *Sehzade* の
孫娘の子供たち) *Sultanazade çocukları* (皇帝の皇子の
エフザードの娘の子供たち) は除外された。以上の件に
関しては、Murat, Bardakçı, *Son Osmanlılar, Osmanlı
Hanedanının Sürgün ve Miras Öyküsü*, Gri Yayınları,
İstanbul 1991, i; Kanun no: 5371, Kabul Tarihi: 18.04. 1949,
Resmî Gazete ile Yayın ve İlanı: 25.04.1949-Sayı: 7190,
Yatandaşlık Kanununa Bazı Maddeler Eklenmesine Dair
Kanun; Kanun no: 5958, Kabul Tarihi: 16.06. 1952, Resmî
Gazete ile Yayın ve İlanı: 23.06.1952-Sayı: 8142, *Hülafe'nin
İlgasına ve Hanedan-ı Osmanî'nin Türkiye Cumhuriyeti
Memaliki Haricine Çıkarılmasına Dair Olan 431 Sayılı
Kanunun 2. Maddesinin Değiştirilmesi ve Aynı Kanuna
Bazı Maddeler Eklenmesi Hakkında Kanun*; Kanun no:

1803, Resmi Gazete ile Yayımlı ve İlanı: 18.05. 1974, Cumhuriyetin 50. Yılı Nedeniyle Bazı Suç ve Cezaların Affı Hakkında Kanunun 8. Maddesi"を参照。なお、女系皇族は一九五二年六月一六日付けの法律、男系皇族は一九七四年の大赦令によりトルコに戻る権利を与えられたことを付けくわえておきたい。

- (42) Şehzadeとは皇帝の息子の尊称であるとともに皇位に就かなかったシェフザーデの息子も同じ尊称で呼ばれた。
- (43) カリフ・アブデュルメジド・エフエンディ (Halife Abdülmecid Efendi) は、第32代皇帝アブデュル・アジズの息子で一八六八年に生まれた。最後のオスマン帝国皇帝メフメト六世ヴァヒデッティン (VI. Mehmed Vahidettin) が国外に追放されたあと、一九二二年カリフに選出された。一九四四年にパリで客死した。
- (44) アブデュルメジド・エフエンディが当時駐パリ・トルコ大使であったアリ・フェトヒにカリフ位再興の提案のあったことを私的に伝えたことが "Halife Abdülmecid Efendiye İngiliz ve Fransızların Gizli Teklifleri", *Tarih Konuşuyor*, Şubat 1964, c. I, sayı. I, s. 61-65 に語られている。
- (45) Omar, Khalidi, "Hindistan'da Osmanlı Sultanları," *Toplumsal Tarih*, Sayı 124, İstanbul 2004, s.15.
- (46) セルマー・ハーヌムスルタンは皇族が国外追放に処された後、母のハティジェ・スルタンとともにフランス委任統治下にあったレバノンに行き、ベイルートに住んでいた。ネパールの藩王との婚姻が行われたのはこの後の

ことである。結婚生活は結局、うまくいかず、離婚してパリに行き、貧窮のなかで亡くなった。彼女の波乱の人生について後に娘でジャーナリストでもあるケニゼ・ムラト Kenize Murat が *De la part de la Princesse morte*, Paris, 1987 (トルコ語訳 *Saraydan Sürgüne*, (çev: Esin Çelikkhan), İstanbul, 1990) という小説の形で発表されている。

- (47) ファトマ・ネリシャー (Fatma Neslişah) がムハンマド・アブデル・モネイム (Prens Muhammed Abdel Moneim) と、ゼフラー・ハンザデ・スルタン (Zehra Hanzade Sultan) がムハンマド・アリー・イブラヒム (Prens Muhammed Ali Ibrahim) と、ネズムラ・イイベトウッラー・スルタン (Necla Heybetullah Sultan) がネビル・アムル・イブラヒム (Nebil Amr Ibrahim) とそれぞれ結婚したのがそれである。
- (48) Murat Bardakçı, *Son Osmanlılar*, İstanbul, 1991, s. 37; 以下同。

- (49) T.C Başbakanlık Devlet Arşivleri, Cumhuriyet Arşivi, *Arnavutluk Kralı Zago'nun kızkardeşiyle II. Abdülhamit'in oğlu Abidin'in düğünleri ile ilgili Tiran gazetesinde çıkan yazılar*. Tarih: 14/2/1936, Dosya: 244232, Fon Kodu: 30.10.0.0, Yer No: 203.387.13.
- (50) T.C Başbakanlık Devlet Arşivleri, Cumhuriyet Arşivi, *İngiltere'nin teşvikiyle Haydarabat Nizamının kızı hanedan*

mensuplarına vermek için yaptığı girişimler, Tarih: 11/6/1933, Dosya: 244211, Fon Kodu: 30.10.0.0, Yer No: 203.386.14; *Hintli prenslerle evlenen sakat hanedan mensuplarının Hindistan'a girmeden Mısır'a uğrayacaklarının haber alındığı*, Tarih: 10/12/1931, Dosya 244195, Fon Kodu 30.10.0.0, Yer No: 203.385.18; *Hindistana hareket eden Gandi ve Hintlilerle evlenen sakat hanedan mensuplarının durumları hakkında alınan haber*, Tarih: 29/12/1931, Dosya: 244196, Fon Kodu: 30.10.0.0, Yer No: 203.385.19.

- (15) Great Britain, Foreign Office, Index to Green Secret Papers for the Year 1933, E 7890/7890 44, *Plot of Prince Mahmud Shaakat Seif-ed-din to Overthrow Present Regime: H.M.G.'s support asked*. 1933; E 5030/5030/44, *Prince Mahmud Shaakat Seif-ed-din: Plot to secure re-establishment of Sultanate in Turkey*, 1934. 5499 トムズ・シムズ・エフエンディ (Mahmud Şevket Efendi) 一族の一人は、一九二八年にカリフ・アブドゥルメジドによって廃されている。

- (52) Kadir Mısıroğlu, *Osmanlıların Dramı*, Sebîl Yayinevi, İstanbul 1990, s.301.
- (53) Murat Bardakçı, *Son Osmanlılar*, s.55.
- (54) Yılmaz Öztuna, *Devletler ve Hanedanlar Türkiye (1074-1990)*, Kültür Bakanlığı Yayınları, c. II, Ankara 1996, s.325.

- (55) これらの皇族のうちメフメド・アブド・エフエンディ

一九三〇年代における日本のイスラーム政策とオスマン皇族

(Mehmed Abid Efendi) とアブデールケリム・エフエンディ (Abdülkerim Efendi) にについてはその血統をたどる必要がなくなる。しかし、他の二人の血筋については疑わしき点が残されている。

- (56) Andrew D.W. Forbes, *Doğu Türkistan'daki Harp Beyleri, (Doğu Türkistan'ın 1911-1940 arası Siyasi Tarihini)*, (çev. Enver Can), Doğu Türkistan Vakfı Yayınları, İstanbul 1990, s.198.

- (57) 必要に応じて次の書を参照。Andrew D.W. Forbes, *Doğu Türkistan*, İstanbul 1990; Lars Eric Nayman, *Great Britain and Chinese, Russian and Japanese Interests in Sinkiang 1918-1934*, Malmo 1977. 本書が使う史料が豊富で、ヨーロッパ諸語で書かれた史料とならべると日本語の史料が多く含まれている。

- (58) *Yeni Milli Yol*, Berlin, Mayıs, 1934, Yıl 6, Sayı (76) 5, s. 38-39; T.C Başbakanlık Devlet Arşivleri Cumhuriyet Arşivi, *Berlin'de Yayınlanan Yeni Milli Yol Gazetesinde Çıkan Doğu Türkistan'da Kıyam Adlı Yazı*, Dosya : 3. Büro, Fon Kodu: 490.1.0.0 Yer No: 609.111.17, 文書館に所蔵されるこの史料は現代トルコ語に訳されているが、誤りが見つけられる。たとえば Cemaladdin の名前が誤って Cemal と記されている例がそれである。 *Yeni Milli Yol* 所収の論文を現代トルコ語に翻訳してくれた友人のアフメト・オズジャンに謝意を表する。

- (59) シェハーレッディンがインドに行ったことについては *Great Britain, Foreign Office, Index to Green Secret Pa-*

pers for the Year 1934, E 1899/1899/44(file), 1934 に言及されている。

- (60) 外務省外交史料館『在本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件 回教関係』第三卷、五〇一―五〇二頁。なお、この史料の読解にあたってはアンカラ大学講師杉山剛氏の力添えを得た。ここに記して感謝したい。

- (61) この人物は一九三三年反乱時の司令官の一人マフムト・ムヒティ (Mahmut Muhiti) の可能性が高い。反乱が鎮圧された後、新たな指導体制を敷いて体制の立て直しをはかったが、一九三七年四月暗殺の危険を察知し、側近の部下とともにインドに逃亡した。インドにしばらく留まったムヒティと兄のムスル・ムヒティ (Musul Muhiti) はその後日本に渡った。マフムト・ムヒティは日本占領下の北京で、兄のムスル・ムヒティは一九四四年東京で亡くなった。彼の墓は多磨霊園内のタートル人墓地にある。その所在について教示され、多くの問題について助言を賜った東京トルコ人協会々長テミンダル・ムヒト氏に深甚の謝意を表したい。マフムト・ムヒティについて詳しくは M. Ali Taşçı (derleyen), *Esir Doğu Türkistan İçin, İsa Yusuf Alptekin'in Mücadele Hatıraları*, İstanbul 1985, s. 285, 332-334, 384-385 を参照のこと。

- (62) オスマン帝国皇室の世系については Yılmaz Öztuna, *Devletler ve Hanedanlar Türkiye*, c. II, s. 280-424; Anthony Dolphin Alderson (çev. Şefiaddin Severcan), *Bütün Yönleriyle Osmanlı Hanedanı*, İstanbul 1999, 289-299; Murat Bardakçı, *Son Osmanlılar*, s. 195-203 を参照。ア

ルプテキン (İsa Yusuf Alptekin) の回想録には一九三八年ボンベイにおいてマフムト・エクレム・ルザ (Mahmud Ekrem Rıza) という名のオスマン皇族を名乗る人物と会ったことが記されている。しかし、彼はこの人物の信憑性については疑わしいと述べている。この件については M. Ali Taşçı (derleyen), *Esir Doğu Türkistan İçin, İsa Yusuf Alptekin'in Mücadele Hatıraları*, İstanbul 1985, s. 340-342 を参照。

- (63) Great Britain, Foreign Office, Index to Green Secret Papers for the Year 1935, P 4525/1/150, Prince Ali and Prince Ekrem: proposal for a Moslem Weekly Journal, *L'Acqueil Musulman*, 1935.

- (64) Kadir Mısırlıoğlu, *Osmanogullarının Dramı*, s. 394.

- (65) Great Britain, Foreign Office, Index to Green Secret Papers for the Year 1935, *Visit of Prince Bahaeddin Samy to Malaya*: Visa, E 6349/E 7416/3868/379.

- (66) メフメト・アビュ・エフエンディ (Memed Abid Efendi) は、一九〇五年ウルドゥズ・サライに生まれた。軍人としての教育を受けた後、下士官に任じられた。トルコを離れた後パリ大学法学部、東洋語学校ペルシア語科を卒業し、一九七三年ベイルートで没した。墓はダマスクスのスルタン・セリム・モスクの廟内にある。

- (67) Yılmaz Öztuna, *Devletler ve Hanedanlar Türkiye* c. II, s. 335-336. ただし、Öztuna は皇子が長い間放置されたままであったとして一九二九―一九四〇になされたものの申し出を受けなかったと書いている。M. Metin Hilagü,

Sultan II. Abdülhamid'in Sürgün Günlüğü, Hususi Doktoru Atıf Hüseyin Bey'in Hatıratı, İstanbul, 2003, s. 559; Meydan Larousse, Abid Efendi maddesi, İstanbul, 1990, c. 1, s. 42 の参照のハナハ。

- (38) Mısırlıoğlu, Kadir, *Osmanoğullarının Dramı*, Sebül Yayınevi, İstanbul 1990, s.356. 本邦ホムス・シリア系開拓者の回想録のハナハの書や参照。Ayşe Osmanoglu, *Babam Sultan Abdülhamid (Hatıralarım)*, İstanbul 1986; Şadiye Sultan, *Hayatımın Acı ve Tatlı Günlüğü*, İstanbul, Tarihîsiz; Mehmet Ferit Ulusoy, *Hanzade, Sürgünde Bir Şehadenin Günlüğü*, İstanbul 2003; Nahid Sırrı Örik (hazırlayan: Alpay Kabacalı), *Bilinmeyen Yaşamlarıyla Saraylar*, İstanbul 2002; Ömer Faruk Yılmaz, *Sultan Abdülhamid Han'ın Harem Hayatı*, İstanbul 2002; Halid Ziya Uşaklıgil, *Saray ve Ötesi*, İstanbul 1965. Murat Bardakçı, *Şahbaba, Osmanogullarının Son Hükümdarı VI. Mehmed Vahideddin'in Hayatı, Hatıraları ve Özel Mektupları*, İstanbul 1998, Yıldız'dan Sanremo'ya, İstanbul, 1999.
- (39) Kadir Mısırlıoğlu, *Osmanoğullarının Dramı*, s.365.
- (70) Yılmaz Öztuna, *Devletler ve Hanedanlar Türkiye*, s.328.
- (71) *ibid.*
- (72) Kadir Mısırlıoğlu, *Osmanoğullarının Dramı*, s.366.
- (73) *Saat-ul Ahrar Gazetesi*, 16 Ağustos 1935. アラビア語で書かれた記事をつトルコ語に訳してくれたエトヘム・ポラト氏に感謝申し上げます。なお、この件については Kadir Mısırlıoğlu, *Osmanoğullarının Dramı*, s. 366 にも言及が

ある。

- (74) Great Britain, Foreign Office, Index to Green Secret Papers for the Year 1933, *Prince Selim: repatriation of his son from India*, E 6019/1309/65, 1933.
- (75) Meydan Larousse, Abdülkerim Maddesi, İstanbul, 1990, c. 1, s. 34.
- (76) ムフシン・チョパンオールに関する情報は、現在アメリカ在住の子息ジュネイト・チャパンオール (Cineyt Çapanoğlu) 氏から得た。情報提供と写真を貸していただいたことに感謝申し上げます。
- (77) 二〇〇一年一〇月六日付けのジュネイト氏からの書簡による。
- (78) 外交史料館『外国新聞記者、通信員関係雑件／土耳其人ノ部』昭和八年一―二〇頁。
- (79) 前掲書、四一六頁。
- (80) 外務省外交史料館『在本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件 回教関係』第一巻、一三四頁。アブデリケリムが来日した日時については東京で発刊されていた *Yeni Yapon Muhbiri* 誌によると五月二二日であった。 *Yeni Yapon Muhbiri*, (Türki Haberler, Sayı 7, 25 Haziran 1933, s. 44-45-46; 田中宏巳氏も「アブドゥルカリム擁立運動と新疆ムスリムの動向」(『神田信夫先生古希記念論集 清朝と東アジア』山川出版社、一九九二年、二三九頁) において来日の時期を同じ日に比定している。
- (81) 外務省外交史料館『在本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件 回教関係』第一巻、二〇一頁。

- (82) 外務省外交史料館『在本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件 回教関係』第一巻、一八九一―一九〇頁。
- (83) 田中宏巳、前掲論文、二三七―二五二頁。
- (84) 田中宏巳、前掲論文、二三八頁。
- (85) 田中宏巳、前掲論文、二三九頁。
- (86) 実川時次郎は有名な国粹主義の政治家平沼騏一郎の私設秘書を務めていた人物である。
- (87) 小林不二男『日本イスラーム史』日本イスラーム友好連盟、一九八八年、八〇―八一頁。
- (88) 田中宏巳によると、小畑敏四郎に近い小磯国昭が後に関東軍の情報部長に就任することによってこの計画が実行に移されていった。
- (89) *Yeni Yapon Muhbiri*, "Türklü Haberler", Sayı 7, 25 Haziran 1933, s. 44. この記事を現代トルコ語に訳してくれたネバーハト・アクバシユに感謝する。
- (90) *Yeni Yapon Muhbiri*, "Tokyo Asahi Gazetesi'nin 10 Eylül Nüşhasından", Sayı 10, 23 Eylül 1933, s. 40.
- (91) アブデュルケリムは東京在住のタタール人コミュニティに当時の金び五〇〇円を寄附した。
- (92) *Yeni Yapon Muhbiri*, "Tokyo Asahi Gazetesi'nin 10 Eylül Nüşhasından", Sayı 10, 23 Eylül 1933, s. 41.
- (93) *The China Weekly Review*, 21 October 1933, p.322.
- (94) 小林不二男『日本イスラーム史』日本イスラーム友好連盟、一九八八年、八一頁。
- (95) 田中宏巳「前掲論文」、二三九頁。
- (96) Office of Strategic Services, Research and Analysis Branch, *Japanese Infiltration among Muslims in China*, O. S.S. R & A 890.1, 15. Mayıs. 1944, p.116.
- (97) *The China Weekly Review*, 31 March 1934, p.167.
- (98) *The Times*, 6 April 1934, p.11.
- (99) *The Times*, 4 April 1934, p.11.
- (100) *Le Temps*, 4 Avril 1934.
- (101) *The China Weekly Review*, 5 May 1934, p.382.
- (102) "Şarki Türkistanda Teşekkül Eden Cumhuriyet", *Vakit*, 22 Ocak 1934; "Ortada Bir Entrika Kokusu Var", *Vakit*, 26 Ocak 1934.
- (103) ドンガンとは中国のイスラーム教徒のことである。
- (104) Andrew D.W. Forbes, *Doğu Türkistan*, s.223.
- (105) 小林不二男『日本イスラーム史』日本イスラーム友好連盟、一九八八年、八一頁。
- (106) "Death of a Turkish Prince", *The Times*, London, 5 August 1935, p.12.
- (107) "Prince Takes Life in New York", *North-China Daily News*, 5 August 1935, p.1.
- (108) "Prince of Turkey Ends his Life Here", *North-China Daily News*, 4 August 1935, p.21; "Death of a Turkish Prince", *The Times*, London, 5 August 1935, p.12.
- (109) "Prince, Suicide Here to Get Royal Burial", *The New York Times*, 7 August 1935, p.10.
- (110) "Rites for Turkish Prince", *The New York Times*, 11 August 1935, p.26.
- (111) *Ulus*, 5 Ağustos 1935.

(112) *Cumhuriyet*, 5 Ağustos 1935.

(113) Yılmaz Öztuna, *Devletler ve Hânedanlar Türkiye (1074-1990)*, Kültür Bakanlığı Yayınları, Ankara 1996, c. II, s. 328.

(114) アブデュルケリムに関係する貴重な情報を提供していただいたビュレント・オスマン氏に多大の謝意を表したい。